

史跡賀茂別雷神社境内

2021年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡賀茂別雷神社境内

2021年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、広場・駐車場整備に伴う史跡賀茂別雷神社境内の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

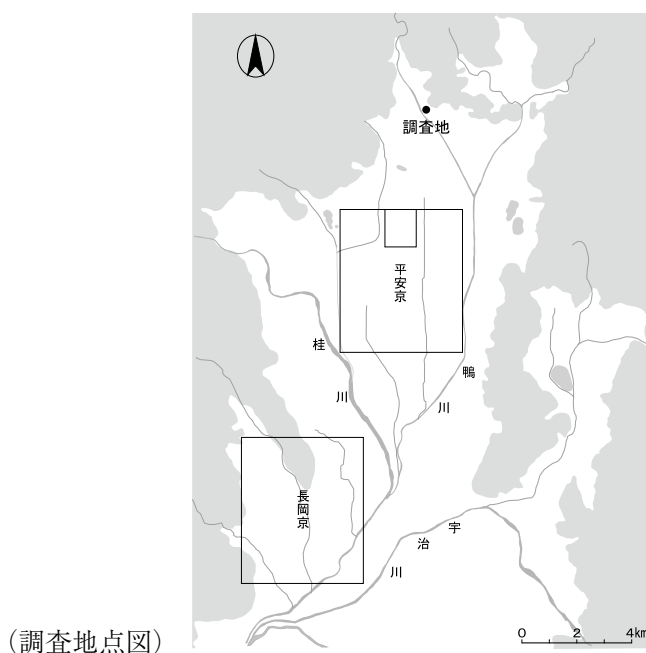
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和3年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡賀茂別雷神社境内（京都市番号 2 N 129）
- 2 調査所在地 京都市北区上賀茂本山339番地
- 3 委 託 者 宗教法人 賀茂別雷神社 代表役員 田中安比呂
- 4 調査期間 2021年6月14日～2021年7月2日
- 5 調査面積 12㎡
- 6 調査担当者 モンペティ恭代
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西賀茂」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、銭貨は「銭」をそれぞれ頭に付した。
- 12 本書作成 モンペティ恭代
- 13 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	3
(3) 周辺の調査	4
3. 遺 構	6
(1) 1区の遺構	6
(2) 2区の遺構	7
4. 遺 物	8
(1) 遺物の概要	8
(2) 土器類	8
(3) 瓦類	9
(4) 銭貨	10
5. まとめ	11
付章 2018年発掘調査	12

図 版 目 次

図版1	遺構	1区遺構実測図(1:40)
図版2	遺構	2区遺構実測図(1:40)
図版3	遺構	1 1区全景(西から) 2 1区石敷き(南西から)
図版4	遺構	1 2区全景(西から) 2 2区南壁断面(北西から)
図版5	絵図	「神殿舎屋図」部分 元禄4年(1691)
図版6	絵図	「賀茂山全図」部分 享保3年(1718)
図版7	絵図	「安永二年神殿権地諸建物図」部分 安永2年(1774)
図版8	絵図	「境内絵図」部分 明治時代初頭か

挿 図 目 次

図1	調査地点及び周辺の調査地位置図（1：3,000）	1
図2	調査区配置図（1：400）	2
図3	1区調査前全景（北西から）	3
図4	2区調査前全景（西から）	3
図5	1区作業状況（西から）	3
図6	2区作業状況（西から）	3
図7	島状高まり（南から）	6
図8	1区第7層整地層出土土器	8
図9	瓦拓影及び実測図（1：4）	9
図10	出土軒丸瓦	9
図11	出土棟込瓦	9
図12	銭貨拓影（1：1）	10
図13	2018年時点での神社西辺の土塁（南から）	12
図14	2018年調査 1区遺構実測図（1：50）	12
図15	2018年調査 3区遺構実測図（1：50）	13
図16	2018年調査 1区全景（東から）	14
図17	2018年調査 3区全景（東から）	14

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	8

史跡賀茂別雷神社境内

1. 調査経過

この調査は、京都市北区上賀茂本山339番地で計画された賀茂別雷神社宮前広場・駐車場整備事業に伴う発掘調査である。調査地は、賀茂別雷神社（通称「上賀茂神社」）の南西端、神社境内とその西側の道路（府道京都・京北線）を画する土塁の南端に位置する、島状高まりにある。当該地は、史跡賀茂別雷神社境内にあたっており、事前の調査が必要であった。このため、文化庁・京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「府文化財保護課」という）・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という）と賀茂別雷神社が協議を行い、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施する運びとなった。今回の調査は、島状高まりについて、その構造や年代などを明らかにすることを目的とした。

調査区は、島状高まりの形状を把握できる位置に設定された1区と2区の2箇所とし、調査面積は合計約12㎡である。1区・2区ともに笹や樹木が生い茂っており、その樹根により掘削が阻まれた。このため、府文化財保護課と市文化財保護課と協議し、調査区は1区・2区とも当初予定の南半分のみを掘り下げることとなった。

調査はすべて人力により掘削し、平面図・断面図・写真撮影による記録作業を行った。調査中の

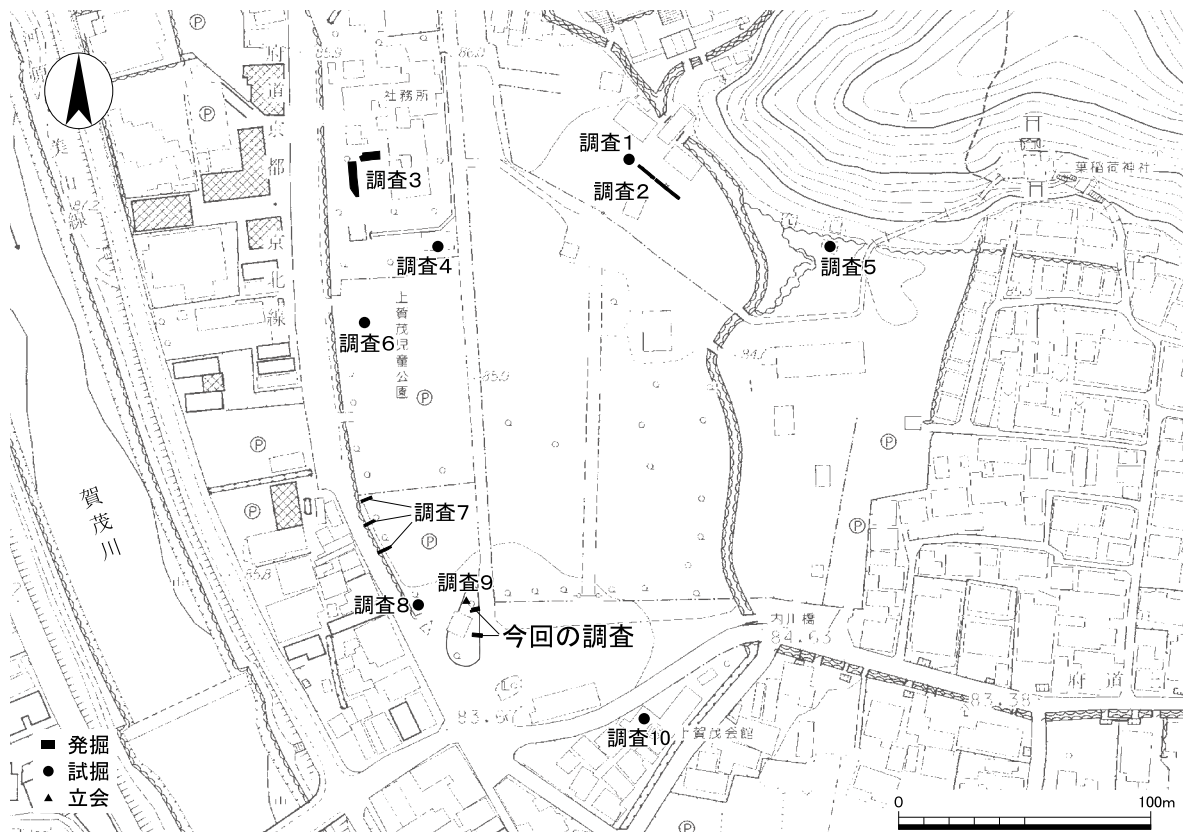


図1 調査地点及び周辺の調査地位置図（1：3,000）

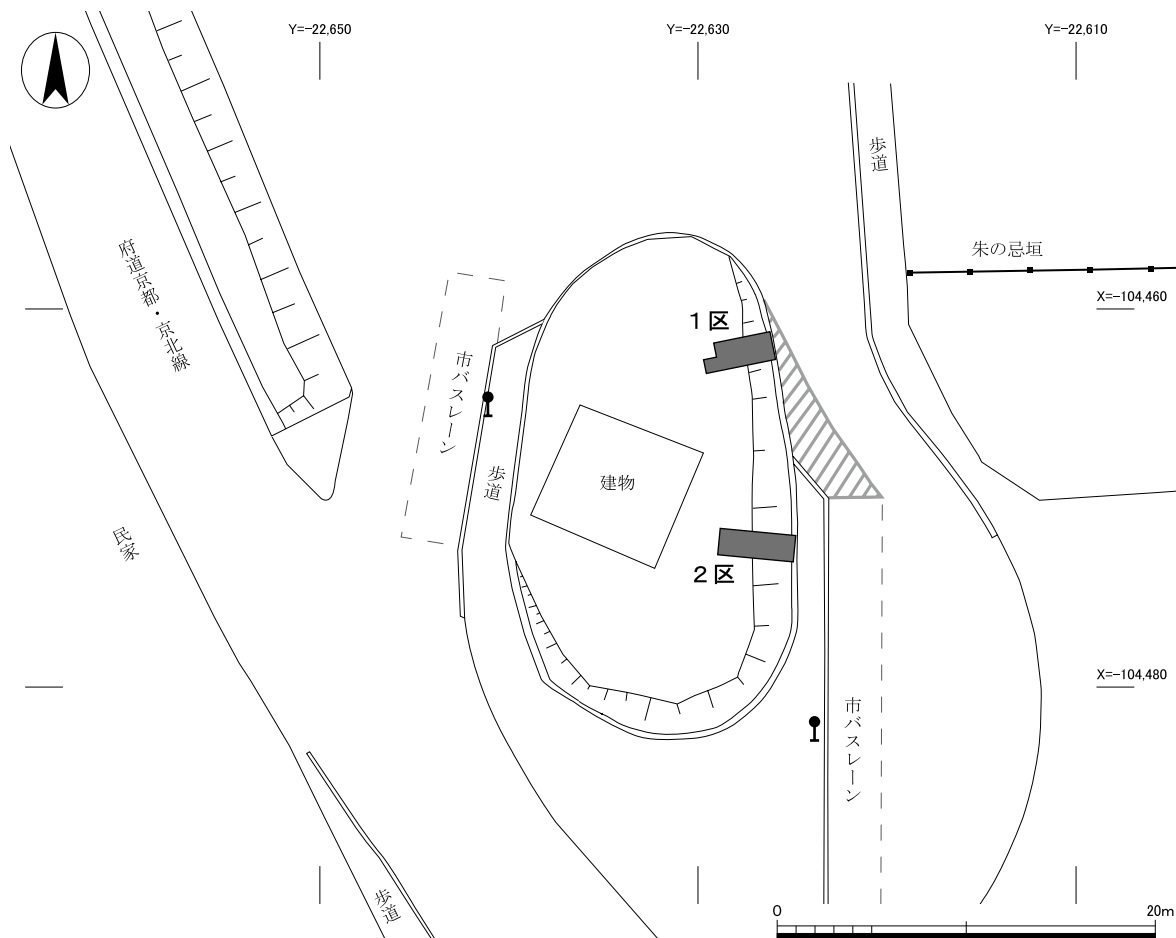


図2 調査区配置図（1：400）

排土は各調査区周辺に仮置きし、調査終了後、人力により埋め戻した。なお、1区で検出した遺構面には土嚢を積んで養生した後、埋め戻した。調査は2021年6月14日から開始し、7月2日に終了した。

調査中には適宜、府文化財保護課と市文化財保護課による臨検を受けた。6月22日には文化庁調査官による視察を受けた。7月1日には、賀茂別雷神社、府文化財保護課、市文化財保護課、当研究所による現地協議を行った。

調査に際しては、賀茂別雷神社、株式会社安藤・間組などの協力を受けた。

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

賀茂別雷神社は、賀茂川左岸、京都盆地と岩倉盆地を隔てる丘陵の西裾部に位置しており、神社と接する丘陵部は神宮寺山（片岡山・標高171m）と呼ばれる。境内地は、国土地理院の地形分類図では扇状地Ⅱ類に分類される。標高は、一の鳥居付近で約84m、本殿付近で約89mである。境内地は广大で、北側は賀茂大神の降臨地とされる神山（丸山・標高301m）の南裾まで広がっていたが、第二次世界大戦後に現在の境内地より北側にゴルフコースが建設された。現在ではこの部分はゴルフ場や住宅地となっている。また、神宮寺山の南裾部には社家町が現在も残されている。

(2) 歴史的環境

神宮寺山の東に連なる上賀茂本山の山腹では、旧石器時代末期のサヌカイト製木葉形尖頭器が¹⁾採集されており、旧石器時代からの人の生活跡を示す。社殿北方から丸山にかけて広がる上賀茂遺跡からは石鏃・石錘・叩き石や縄文土器などが出土²⁾しており、集落遺跡と推定されている。また、4～6世紀ごろのペルシャ産のガラス椀の破片が採集されていることも特記できよう。神社の南に接する上賀茂から下鴨にかけての広い範囲には植物園北遺跡があり、弥生時代後期から古墳時



図3 1区調査前全景（北西から）



図4 2区調査前全景（西から）



図5 1区作業状況（西から）



図6 2区作業状況（西から）

代にかけての大規模な集落があったことが確認されている。

古代山背地方の豪族に、秦氏、八坂氏、出雲氏などとともに賀茂氏の名がある。『山城国風土記』逸文⁴⁾は、大和国葛城郡地方の豪族であった賀茂氏が、現在の京都府相楽郡加茂町の岡田鴨神社を経て、京都市北区紫竹下竹殿町の久我神社周辺へと移動していった軌跡を物語る。賀茂別雷神社の創建については、『山城国風土記』の伝承に賀茂県主一族によって祀られたとある⁵⁾。賀茂社にかかる最も古い記述には『続日本紀』「文武天皇二年三月二日条」(698)に「賀茂祭」に関する記録がある⁶⁾。平安京遷都に際しては、平安京第一の皇城鎮護として祀られ、朝廷から内親王が齋王を務めた。文明8年(1476)の文明の一社争乱では、本殿などを焼失するが、天正19年(1591)には豊臣秀吉により遷宮される。寛永5年(1628)には徳川秀忠により造替される。境内は平成5年(1993)に史跡指定、同6年(1994)には、世界文化遺産に登録されている⁷⁾。

(3) 周辺の調査 (図1)

神社境内では、これまでに10件の発掘調査、試掘調査などが実施されている。以下に、北から順に記す。

調査1・2は、二の鳥居から橋殿に至る広場での防火施設整備事業に伴う調査で、調査1では現地表下-0.7mで中世から近世の参道を検出、近世以降は白色砂で整備されていたことがわかった⁸⁾。調査2では鎌倉時代から現代に至る整地層を検出、各整地層の上面は白色砂で整備されていたことがわかった⁹⁾。

調査3は参集殿控室兼古文書収蔵庫新設工事に伴う調査で、平安時代末期から鎌倉時代、室町時代の2時期の整地層を確認した¹⁰⁾。

調査4では江戸時代の遺構面を確認した¹¹⁾。

調査5は境内摂社、山口社の修理に伴う調査で、現存拝殿の礎石据付状況を確認した¹²⁾。

調査6は耐震性貯水槽設置に伴う調査で、中世の遺物包含層とその下層で賀茂川の氾濫堆積とみられる砂礫層を検出した¹³⁾。

調査7は御蔭橋改築事業に伴う調査で、境内地西辺を限る現土塁の下層から、江戸時代後期の石築地の基底部を検出、現土塁はそれを継承しているものであることが判明した。この調査については「付章 2018年発掘調査」で詳述する。

調査8は現地表下1.0mまで現代盛土であった¹⁴⁾。

調査9は給水管入替工事に伴う立会調査で、現地表下0.35mまで現代盛土であった¹⁵⁾。

調査10では時期不明の整地層を検出した¹⁶⁾。

註

- 1) 田辺昭三「第一章 古代の曙光」『京都の歴史 1 平安の新京』京都市 1970年
- 2) 坂東善平「京都市上賀茂縄文遺跡」『古代学研究』第41号 古代学研究会 1965年
- 3) 坂東善平・森浩一「京都市上賀茂の白瑠璃椀の破片」『古代学研究』第44号 古代学研究会 1966年
「賀茂別雷神社の古代における強大な勢力とガラス碗片の存した地点を総合すると、このガラス碗片は沖ノ島8号遺跡と同種の性質をもったカモ社（神社以前の形態があったことも予想される）への埋納物であった可能性がある。」「上賀茂での本殿背後という場所の関連で最も注意すべき遺跡である。」
- 4) 『新訂増補國史大系 第八卷 釋日本紀』吉川弘文館 1999年
可茂社。稱可茂者。日向曾之峯天降坐神。賀茂建角身命也。神倭石余比古之御前立坐而。宿坐大倭葛木山之峯。自彼漸遷至山代國岡田之賀茂。隨山代河下坐。葛野河与賀茂河所會至坐。見廻賀茂川而言。雖狹小。然石川清而川在。仍名曰石川瀬見小川。自彼川上坐。定坐久我國之北山基。
- 5) 前掲4)
汝父將思人令飲此酒。即舉酒环。向天爲祭。分穿屋薨而升於天。乃曰外祖父之名。號可茂別雷命。
- 6) 『新訂増補國史大系 續日本紀前篇』吉川弘文館 1977年
禁山背國賀茂祭日會衆騎射
- 7) 賀茂別雷神社の歴史については他にも、賀茂別雷神社今井守権宮司からご助言を賜った。
- 8) 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』京都市文化市民局 2021年
- 9) 2022年報告書刊行予定
- 10) 『史跡賀茂別雷神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 11) 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年
- 12) 「V-2史跡賀茂別雷神社境内No.84」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 13) 「6. 付章 1989年試掘調査」『史跡賀茂別雷神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 14) 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年
- 15) 「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 16) 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』京都市文化市民局 2021年

3. 遺 構

(1) 1区の遺構 (図版1・3)

1区は鳥状高まりの北東部、一の鳥居に取り付く朱の忌垣を西へ延長したラインより少し南に位置する。調査区は当初南北1.5m、東西3.7mで設定したが、多くの樹根に阻まれ、予定範囲の掘削が不可能であることがわかった。このため、南半分を調査対象とした。調査区地表面の標高は、鳥状高まりの東側歩道上で83.69m、石垣上端で84.90m、盛り上がり頂部で85.32m、西端で84.38mである。



図7 鳥状高まり (南から)

基本層序

表土の腐植土層 (図版1 - 第1層) は厚さ0.3mある。その下層は、径3~10cmの礫が多量に混じる厚さ0.1~0.3mの近現代層 (同 - 第4層) である。その下層は、黄褐色砂泥層 (同 - 第6層) の土塁構築土層となる。この土塁西裾部で石敷き遺構を検出した。この下層では、江戸時代の整地層とみられる固く締まるオリープ褐色砂泥層 (同 - 第7層) を検出した。この下層で、小礫が極少量混じる暗褐色砂泥層 (同 - 第8層) を検出、後述する2区での中世遺物包含層 (図版2 - 第5層) に対応する層と考えられる。最下層 (標高83.74m) は、地山のにぶい黄褐色砂泥層 (図版1 - 第9層) となる。

遺構

土塁・石敷き 土塁の検出規模は東西約2.5m、高さ約0.3mで、南北約0.5m分検出した。構築土 (図版1 - 第6層) 上面は固く締まり、中央部で盛り上がる。東側は現代の石垣によって削平される。西裾部では、拳大から人頭大の円礫が敷き並べられた石敷きを検出した。石敷きはオリープ褐色砂泥層 (同 - 第7層) を基盤として西へ傾斜する。石敷きの基底石は褐色砂泥層 (同 - 第5層) に覆われる。第7層は、樹根の影響により確認できなかったが、基底石の掘形埋土か土塁構築土と一連の整地の可能性などが考えられる。石敷きは、土塁の構築土の流出を防ぐために施されたと考えられる。第7層整地層や土塁構築土から江戸時代中期の遺物が出土した。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
鎌倉時代後半 ~室町時代前半	2区: 遺物包含層	
江戸時代中期	1区: 土塁、石敷き	

(2) 2区の遺構 (図版2・4)

2区は、鳥状高まりの北東部の1区の約10m南側の地点に、南北1.4m、東西4.0mの規模で設定した。しかし、1区同様に木の根の繁茂が著しく予定範囲の掘削が不可能であったため、南北幅は当初予定の南半部のみとした。調査区の現況は、東側は石垣で限られ、中央部で盛り上がり、西側で平坦となる。調査区地表面の標高は、石垣東側の歩道上で83.70m、石垣上端で84.43m、中央の盛上り部で84.99m、西側の平坦部で84.35mである。

基本層序

ほとんどすべてが土管の掘形埋土であった。地山はにぶい黄褐色砂泥(図版2-第6層)である。土管の埋土から銭貨が3枚出土した。

遺構

遺物包含層 調査区西端において、地山直上で土師器片を多く含む暗褐色砂泥層(図版2-第5層)を検出した。出土した土師器は細片のため、詳細な年代は決め難いが、鎌倉時代後半から室町時代前半に属する。

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表2)

遺物は、整理コンテナにして2箱分が出土した。出土遺物には、土師器・陶磁器などの土器類、瓦類、金属製品、銭貨などがある。全体の9割近くが土器類、残り1割がそれ以外の遺物である。

遺物の時期は鎌倉時代から近代までのものがあるが、江戸時代の遺物が最も多い。

鎌倉時代から室町時代の遺物には、2区第5層から出土した土師器皿がある。多くを白色系が占めるが、すべて細片で磨滅が激しく図示することはできなかった。詳細な時期は決め難いが鎌倉時代後半から室町時代前半とみられる。

江戸時代の遺物には、土師器、瓦質土器、染付磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦類、銭貨、金属製品などがある。瓦類には、軒丸瓦・棟込瓦がある。銭貨には、寛永通寶がある。金属製品には、銅線がある。

近代の遺物には、染付磁器、施釉陶器、瓦類、土管、ガラス製品、銭貨、金属製品がある。金属製品には、鉄釘がある。銭貨には、五厘硬貨がある。

(2) 土器類 (図8)

1区第7層整地層出土土器 土師器、染付磁器、施釉陶器などが出土した。

1は土師器皿である。口縁部内面下部に圈線が巡る。体部外面に横方向のナデによる凹みが一段明瞭につく。江戸時代中期。

2・3は肥前産染付磁器である。2は薄手の小椀で、外面には山水文が施され、口縁部内面には二重圈線が薄い呉須で施される。3

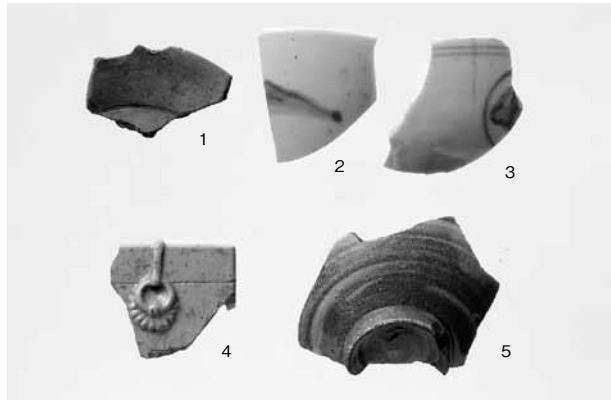


図8 1区第7層整地層出土土器

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
鎌倉時代後半 ～室町時代前半	土師器				
江戸時代	土師器、瓦質土器、染付磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦類、銭貨、金属製品		土師器1点、染付磁器2点、施釉陶器2点、軒丸瓦1点、棟込瓦1点、銭貨2点		
近代以降	染付磁器、施釉陶器、瓦類、土管、ガラス製品、銭貨、金属製品		銭貨1点		
合計		2箱	10点(1箱)	1箱	0箱

は椀で、文様は不明であるが、口縁部外面には二重圈線が入る。

4・5は施釉陶器である。4は京信楽系の水滴で、淡黄色を呈し、外面に飾り金具状のものが加飾される。5は小ぶりの唐津焼刷毛目椀である。時期はいずれも江戸時代中期のものである。

(3) 瓦類 (図9～11)

瓦は各調査区から出土したが、軒瓦類は1区第4層東半からのみ出土した。

瓦1は三巴文軒丸瓦である。巴の頭・尾は離れる。外面は縦ナデ。丸瓦接合部分にオサエ痕がある。裏面に丸瓦挿入部分の痕跡がある。

瓦2は菊花文棟込瓦である。菊花は凹弁十六葉一重で中房はボタン状である。瓦当面下半部にキラ粉が付着する。瓦当裏面はナデ。差し込み部は約5cm残存し、外面、裏面ともナデ調整を施す。外径9.6cm。

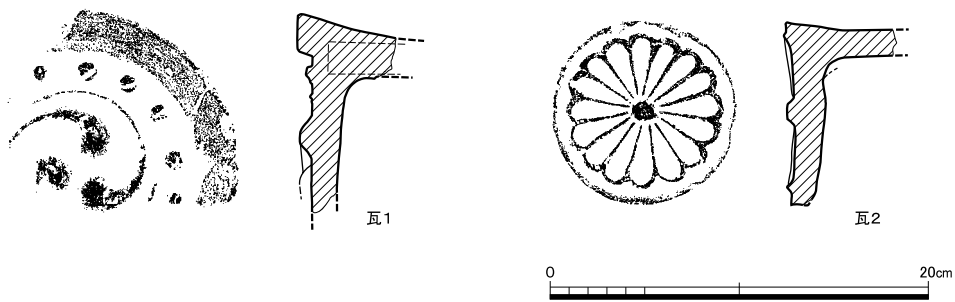


図9 瓦拓影及び実測図 (1:4)



図10 出土軒丸瓦



図11 出土棟込瓦

(4) 銭貨 (図12)

今回の調査で出土した銭貨は3枚ある。うち2枚は寛永通寶、1枚は五厘硬貨である。すべて2区第4層(土管埋土)に混入して出土した。

銭1・2の寛永通寶は、裏面に「文」の銘があるいわゆる寛文期の文銭である。初鑄年は寛文8年(1668)。銭1は外径2.53cm、厚さ0.15cm、穿孔径0.57cm、重量3.33gである。銭2は外径2.53cm、厚さ0.15cm、穿孔径0.58cm、重量3.72gである。銭1と銭2の2枚は一部分重なった状態で出土した。

銭3は五厘硬貨である。表面には、周縁に唐草文、上下に十葉の菊花の図柄があしらわれ、中央に「五厘」の文字がある。裏面には左右に桜花、中央に五七の桐文があしらわれ、「大日本」「大正七年」の文字が右横書きされる。青銅製である。外径1.90cm、厚さ0.12cm、重量1.95g。五厘硬貨は、大正5年(1916)から8年(1919)の4年間のみ発行された。

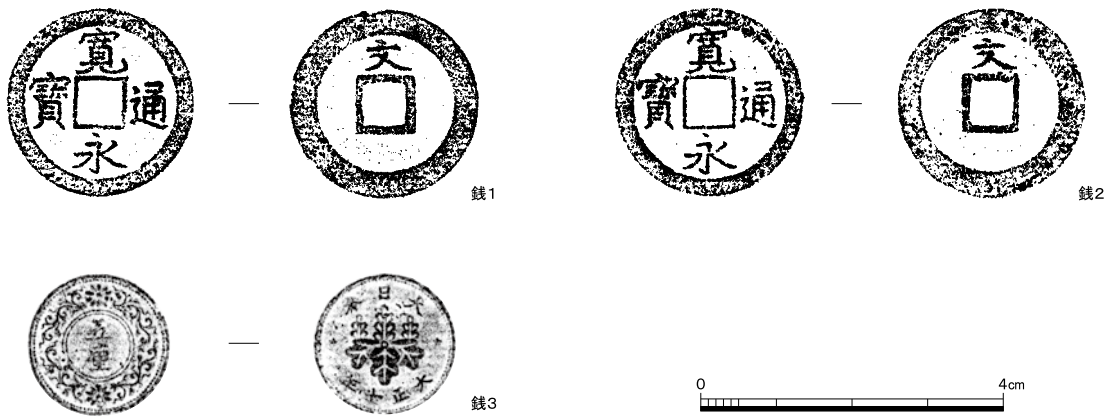


図12 銭貨拓影(1:1)

5. まとめ

1区では、西裾部に石敷きを施した土塁を検出した。土塁構築土及び整地層から出土する遺物から、江戸時代中期頃の構築と考えられる。また、石敷きの基底石を検出したことで、西側の端は明確にできた。しかしながら、東端は現石垣の掘形により削平されているため不明で、土塁の東西幅を確定することはできなかった。

江戸時代の¹⁾絵図から、神社境内の南西隅に「聖神寺」が存在していたことがわかる。元禄4年(1691)の「神殿舎屋図」(図版5)に、一の鳥居に取り付く朱の忌垣の西側延長ラインを南端とし、板塀状の施設で囲まれた堂舎が描かれている。²⁾ところが、享保3年(1718)の「賀茂山全図」(図版6)では、朱の忌垣の西側延長ラインの南に樹林が石垣状の施設で囲まれた区画が描かれるようになる。安永2年(1774)の「安永二年神殿権地諸建物図」(図版7)や明治時代初頭の「境内絵図」(図版8)でも樹林が石垣と垣根で囲まれる区画が表現されている。絵図の描かれる朱の忌垣の位置が現在と大きく変化していないとすれば、調査地の鳥状高まりは、享保3年以降の絵図に描かれる「聖神寺」南側の垣根などによって囲まれた区画とみられる。そうした場合、1区の江戸時代中期に構築された土塁は、絵図類に描かれる「聖神寺」南側の区画縁辺部を画するものとみられる。

2018年に神社境内の西端を限る土塁において発掘調査(図1-調査7)が行われている。この調査では、境内地西辺を限る土塁が江戸時代にさかのぼり、当初は石築地であったことが判明した。絵図と現況との比較から、位置的には聖神寺の西辺にあたりとみられ、この石築地と今回の調査対象となった鳥状高まりは一連のものであったことがわかる〔付章 参照〕。

2区では、ほとんど攪乱を受けていたが、一部で鎌倉時代後半から室町時代前半の土師器を含む遺物包含層を検出した。1区でもこれに相当する層を確認している。1989年の調査(図1-調査6)で中世の遺物包含層を、2011年の調査(図1-調査3)で中世の整地層を検出していることから、一帯が中世から境内地として維持されていたものと考えられる。

なお、2区では敷設された状態で土管を見つけている。土管には、「AICHI NIPPON TOKAN」の刻印があり、常滑産であることがわかる。西から東へわずかに傾斜して据え付けてあり、鳥状高まりから外側への排水と考えられる。現在、鳥状高まりの中心に建物が建っているが、神社の話では、この建物は、昭和30年代後半に建てられ、それ以前には建物は建っていなかったということである。この土管はこの建物建設に伴うものとみられる。

今回の調査は小規模ではあったが、江戸時代中期の遺構が地中に存在することが判明、鳥状高まりは江戸時代からの姿をよく留めていることが明らかとなった。

註

- 1) 賀茂別雷神社史料編纂会編『賀茂別雷神社史料 絵図』賀茂別雷神社 2018年
- 2) 近年発見されたこの絵図の異本ともいえる境内絵図には、聖神寺の周縁に石垣状施設が描写されている。前掲1)の179頁に紹介されている。

付章 2018年発掘調査

調査経過 (図1・13)

調査地は、神社境内とその西側の道路（府道京都・京北線）を画する南北方向の土塁で、道路に面しては石垣が積まれている。この道路の改修が検討されたため、2018年に発掘調査が実施された（図1 - 調査7）。土塁上に調査区を3箇所（南から順に1～3区）設定し、面積は合計13.5㎡である。調査は2018年5月21日から開始し、6月15日に終了した。



図13 2018年時点での神社西辺の土塁（南から）

1区の調査 (図14)

最下層の地山（図14 - 第9層）上層で、暗褐色砂泥の固く締まる層（同 - 第8層）を検出した。この層は整地層で、これを基盤として、小礫から拳大の円礫を積み上げた層（同 - 第5・6層）を検出した。この層の東西両端では南北方向に並んだ人頭大の石を検出した（図16）。本来は数段積み上げたと思われる、これらの遺構は南北方向の石築地の構築礫と石積みの基底石であることが判明した。石築地は崩落しているため、本来の高さは不明であるが、残存高は0.7mある。両側の基

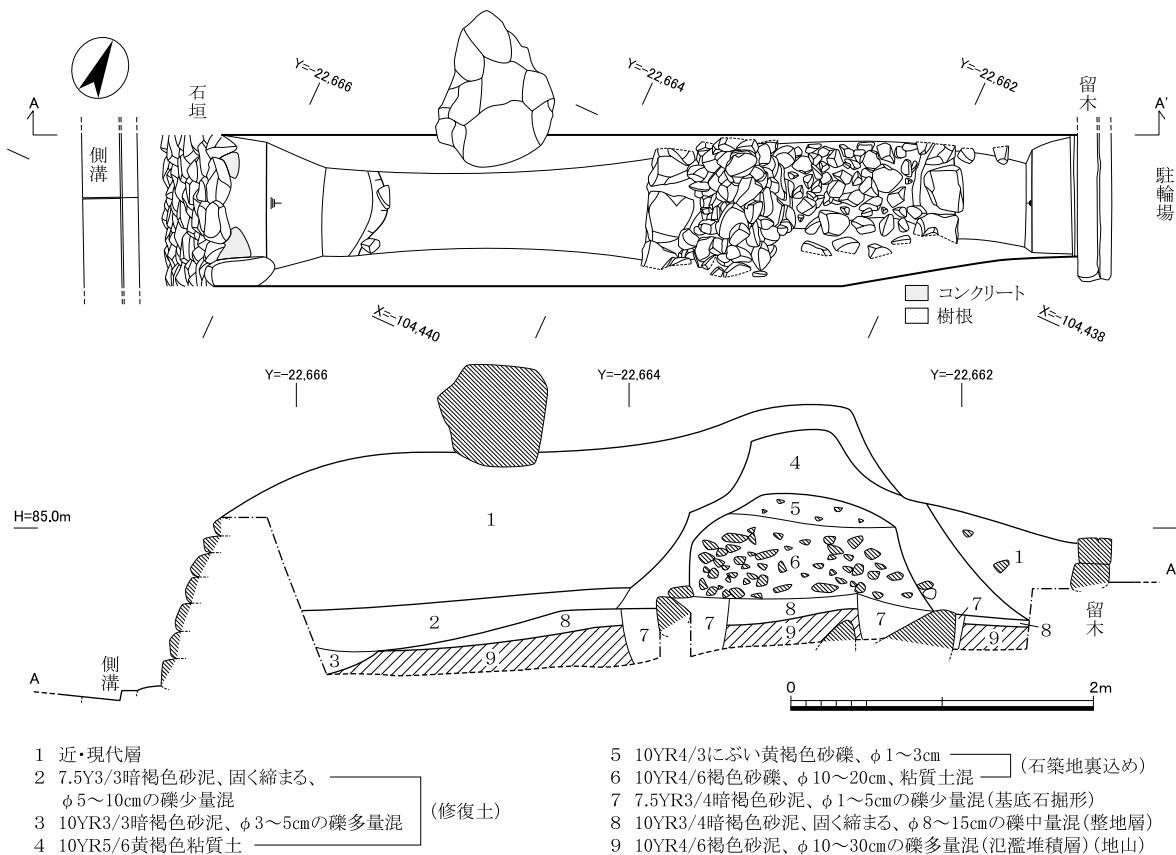


図14 2018年調査 1区遺構実測図 (1:50)

底石から石築地の幅は2.0～2.1mと考えられる。石築地の構築礫は、主に拳大から人頭大の円礫（同－第6層）を用いるが、小礫（同－第5層）も確認した。整地層（同－第8層）から、江戸時代の瓦などが出土した。西側基底石は、現道路側の石垣下端より3.2m東に奥まった位置にある。石築地の上層では、黄褐色粘質土（同－第4層）の高まりを検出した。厚さは最大で約0.45mある。東西幅は2.5m、高さ1.1m。石築地を覆うように積まれており、崩れた石築地を修復するために覆い被せたものと考えられる。これにより、石築地から土塁に変化した。この層からは幕末から明治時代の陶磁器などが出土した。現石垣の裏込めには昭和時代前期の遺物が含まれ、この頃に石垣が積み、現状の規模の土塁となったと考えられる。

2区の調査

ほとんどが現代盛土であったが、一部で黄褐色粘土層を確認した。1区で検出した石築地修復土の高まりに連続すると考えられる。

3区の調査（図15）

1区と同様に最下層の地山（図15－第12層）上層で固く締まる層（同－第8～11層）を検出、これらの整地層が石築地の基盤層となる。その上層には石築地の構築礫となる円礫を積み上げた層があり、その堆積の東西両端で石築地の基底石を確認した（図17）。その幅は2.5mである。1区で検出した石築地に連続するものとなる。石築地の残存高は0.5mある。基盤層から、江戸時代の土師器・陶磁器・瓦などが出土した。なお、西側基底石下端は、現道路側の石垣下端より3.4m東

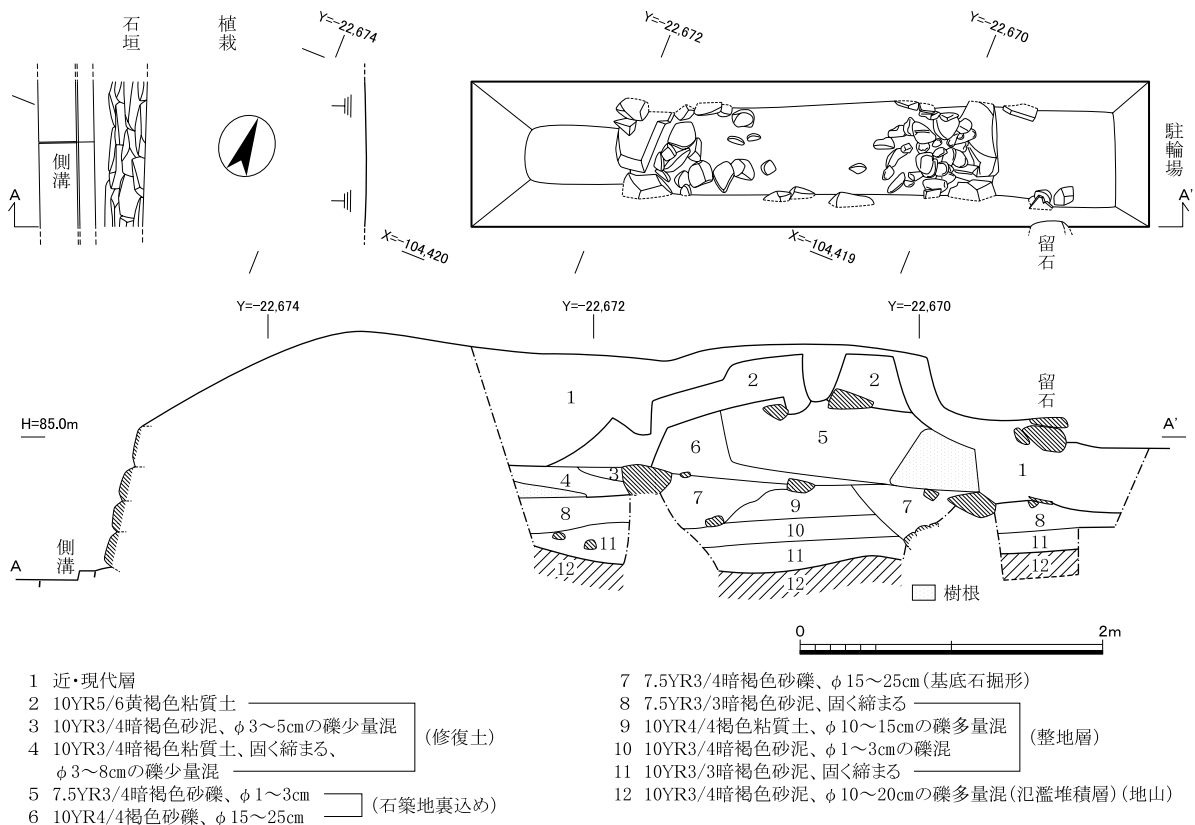


図15 2018年調査 3区遺構実測図（1：50）

に奥まった位置にある。上層では黄褐色粘質土（同－第2層）の高まりを検出、1区と同様の石築地修復土である。

小結

この調査では、神社西側を画する南北方向の土塁は現状を含めて、大きく3段階の変遷を遂げていることがわかった。土塁構築の最初の段階として、氾濫堆積層を整地し、これを基盤として両側に石垣を積み、内部に栗石を詰めた石築地の段階がある。氾濫堆積層の時期は明確にすることはできなかったが、石築地は出土する遺物から江戸時代に構築されたと考えられる。2段階目は崩れ始めた石築地を黄褐色粘土層で覆って修復した段階である。出土する遺物から、修復の時期は幕末から明治時代である。3段階目は西側に石垣が積まれ現状の土塁の規模に拡張した段階となる。

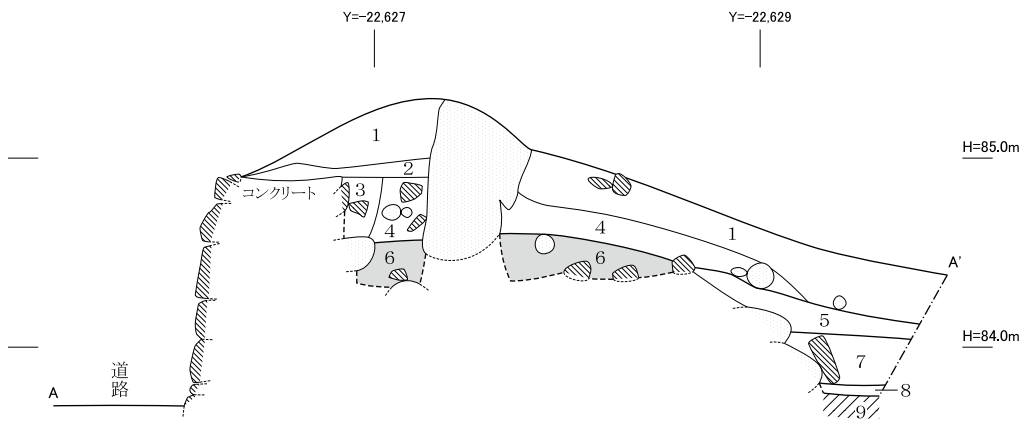
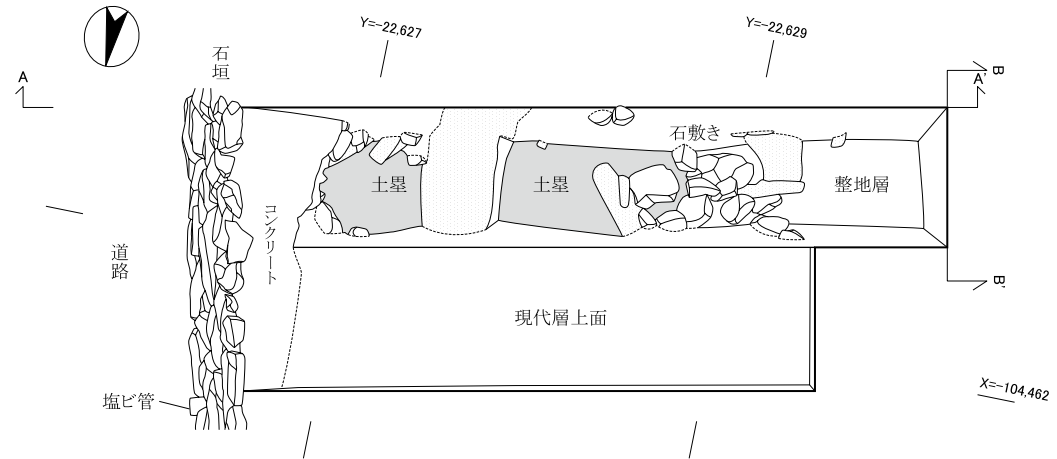


図16 2018年調査 1区全景（東から）

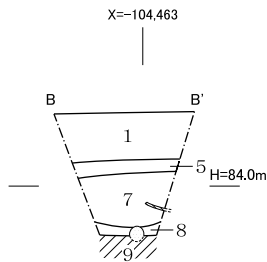


図17 2018年調査 3区全景（東から）

圖 版



- 石
- 樹根
- 土塁構築土

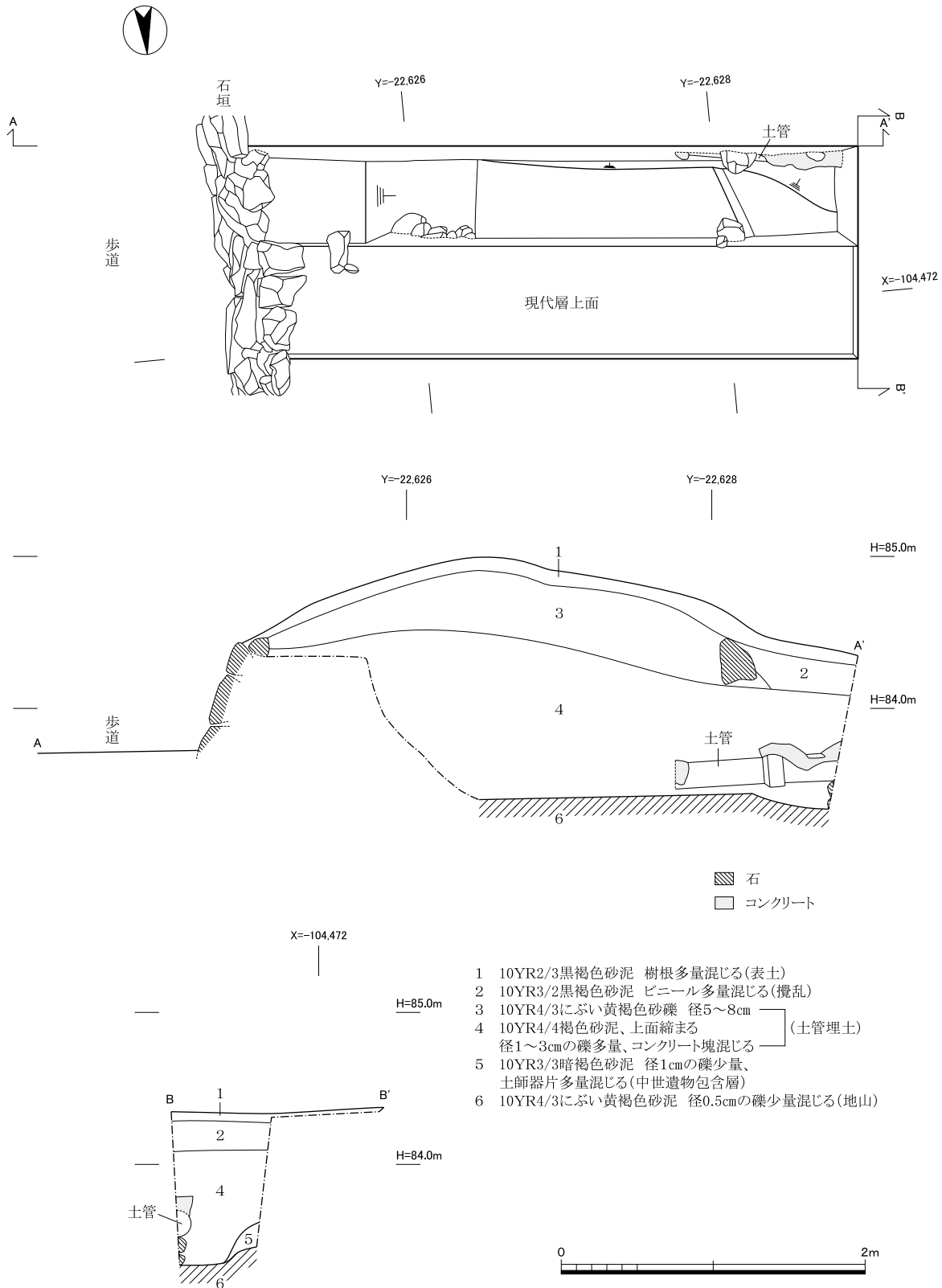


- 1 10YR2/3黒褐色砂泥 樹根多量、プラスチック混じる(表土)
- 2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 径0.5~1cmの礫少量混じる(現代の石垣裏込め上面)
- 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥(現代の石垣裏込め)
- 4 10YR3/4暗褐色砂泥 径3~10cmの礫多量混じる(近代層)
- 5 10YR4/4褐色砂泥(石敷き基底石覆土)
- 6 10YR5/6黄褐色砂泥 径2~3cmの礫少量混じる、上面固く締まる(土塁構築土)
- 7 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 径1cmの礫少量混じる、固く締まる(江戸時代整地層)
- 8 10YR3/3暗褐色砂泥 径1cmの礫極少量混じる(中世遺物包含層)
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 径0.5cmの礫少量混じる(地山)



1区遺構実測図(1:40)

図版2 遺構



2区遺構実測図 (1 : 40)



1 1区全景（西から）



2 1区石敷き（南西から）



1 2区全景（西から）



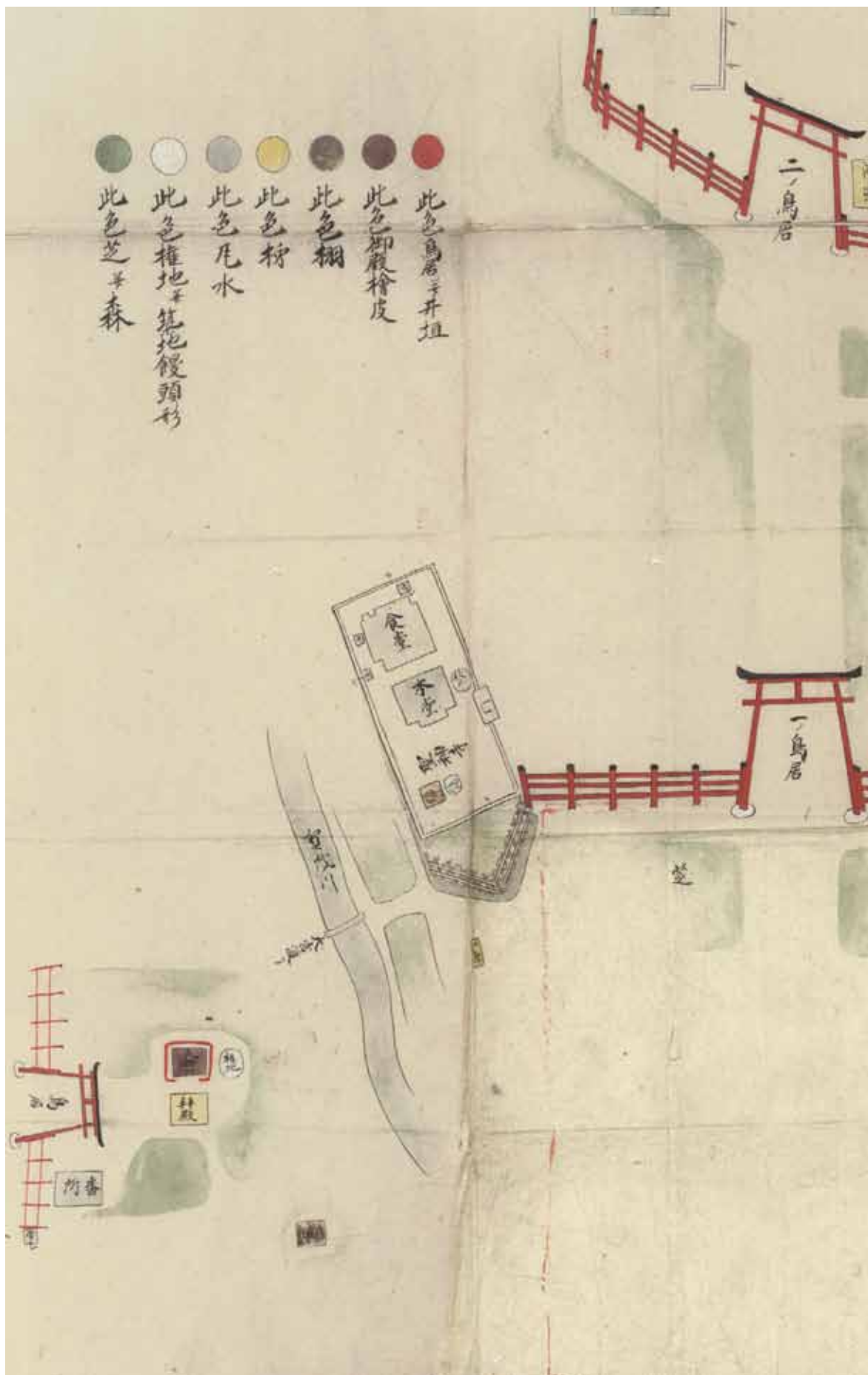
2 2区南壁断面（北西から）



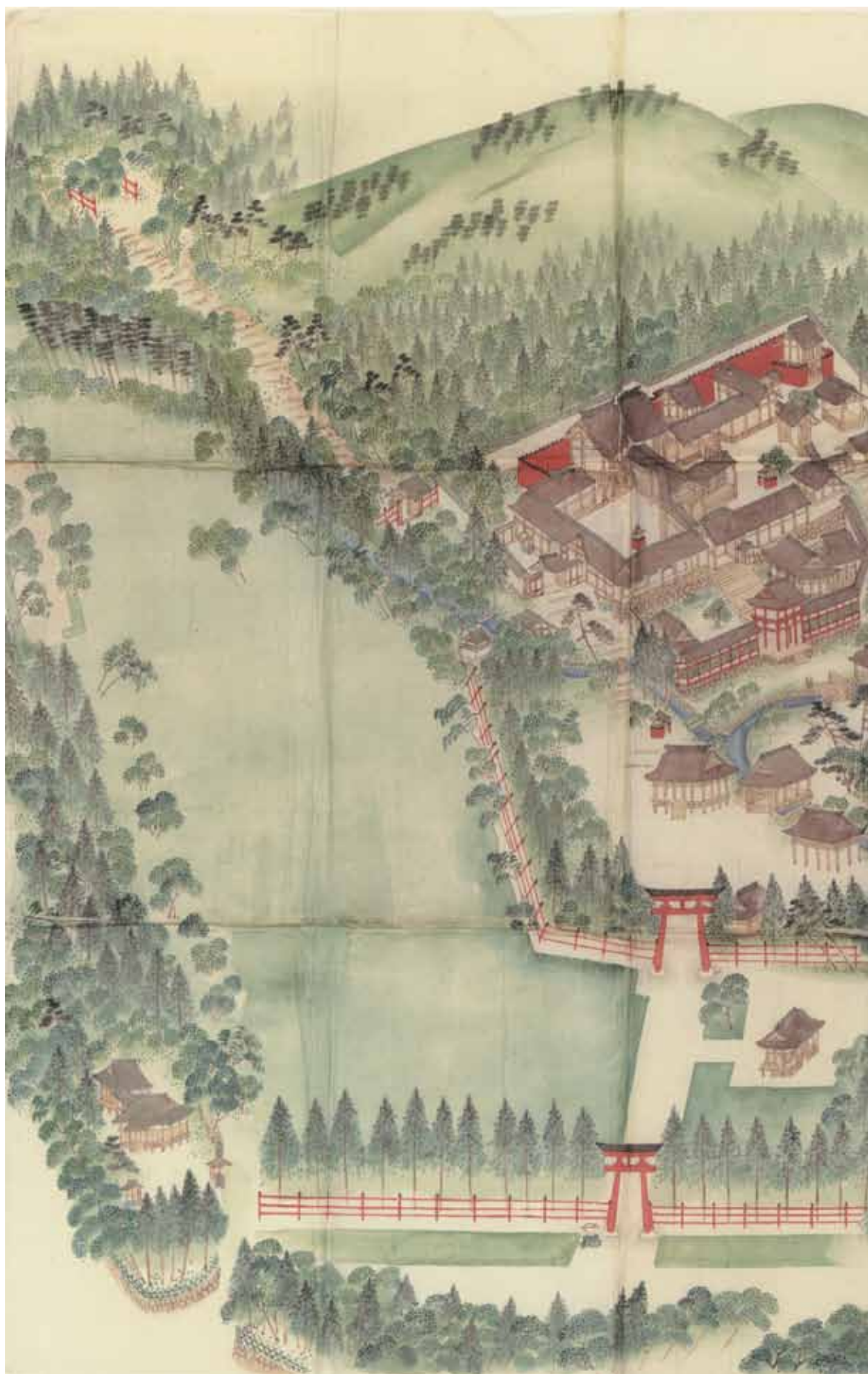
「神殿舎屋図」部分 元禄4年（1691）賀茂別雷神社蔵



「賀茂山全図」部分 享保3年(1718) 賀茂別雷神社蔵



「安永二年神殿権地諸建物図」部分 安永2年（1774）賀茂別雷神社蔵



「境内絵図」部分 明治時代初頭か 賀茂別雷神社蔵

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきかもわけいかづちじんじゃけいだい							
書名	史跡賀茂別雷神社境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2021-2							
編著者名	モンペティ恭代							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2021年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきかもわけいかづち 史跡賀茂別雷 じんじゃけいだい 神社境内	きょうとしきたく 京都市北区 かみがもとやま 上賀茂本山 339番地	26100	A112	35度 03分 29秒	135度 45分 07秒	2021年6月 14日～2021 年7月2日	12m ²	広場・駐 車場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡賀茂別雷神社境内	史跡	鎌倉時代後半 ～室町時代前半	遺物包含層	土師器		江戸時代中期に構築された土塁と、その西裾部に施された石敷きを検出した。		
		江戸時代中期	土塁、石敷き	土師器、瓦質土器、染付磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦類、金属製品、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-2

史跡賀茂別雷神社境内

発行日 2021年8月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961